

武田科学振興財団 杏雨書屋蔵 黒川文庫について

吉川 澄美

東京都

受付：令和4年10月2日／受理：令和5年3月6日

要旨：黒川文庫は江戸時代後期から大正にかけての国学者、黒川春村、真頼、真道の三代に渡る文庫である。体系的に分類された8万冊を超える蔵書は、関東大震災(1923)で3分の2を焼失、その後分散した。震災直後に、黒川文庫の「本草」部門の多くは早川香邨(佐七)が購入して榑考書屋の一部となり、さらに榑考書屋の和漢書は昭和初期に五代目武田長兵衛(杏雨書屋の創設者)が購入した。結果として、杏雨書屋は黒川文庫の「本草」を所蔵しているが、今まで個別の文庫としての関心は、特に払われてこなかった。そこで、黒川氏旧蔵書を特定し、さらに目録を作成した(日本医史学雑誌2023;69(3):316-336)。本稿では黒川氏の事績と蔵書との関わり、ならびに黒川文庫「本草」における蔵書の特徴を検討する。尚、「本草」は主に、医学・薬物・植物・博物・農業・物産の分野を含んでいる。まず、注目されるのは、日本の中世における代表的な医学全書や本草書が含まれ、江戸時代後期の考証家による写本や校訂出版本も伴っていることである。さらに、専門用語の比較や語源、名物学的研究、来歴探索のような、文献考証に関わる個性的な単行本や編纂物があり、ほかにも図譜を含み、和歌にちなんだ珍しい博物書も含まれている。

キーワード：国学者の蔵書、古医書、文献考証、本草、博物

1 はじめに

1.1 黒川文庫について

黒川文庫は江戸後期から明治・大正にかけての国学者・蔵書家、黒川春村・真頼・真道の三代にわたる蒐書である。8万冊余りの本は31部門に分類され、天・地・人の3つの蔵に収められていたが、大正12年(1923)の関東大震災で、「天部」と「地部」のほとんどが崩壊した¹⁾。

幸い災禍を免れた「人部」に医薬書や博物・物産書を含む「本草」部門も含まれていた。他にも文学・日記/紀行・儀礼・経済・政治・法制・神道・仏教関係の書物は救われたが、震災後と第二次大戦後の2度にわたる蔵書整理を経て、結果的に複数の機関に分蔵されることになった。

大半は焼失したとはいえ、江戸後期から大正の各時代に活躍した学者三代の、学術や編纂事業に活用された書籍群という点で重要視され、長年に

わたって分蔵状況の把握に努力が重ねられてきた。まず、1981年に永田清一が主な所蔵機関を明らかにした²⁾。その後、1989年から1996年にかけて、天・地・人の蔵ごとの『書籍目録』の影印が城田秀雄により発表された³⁾。ちなみに、目録は他にも、イロハ順の『色葉書目』、金石分野の『金石図書目録』、部類別の『黒川文庫目録』がある。

そして、2000年までに柴田光彦は広範な所在調査を行い、『黒川文庫目録』の翻刻と索引を作成した⁴⁾。これらの過程で明らかになった所蔵機関は、実践女子大学図書館、ノートルダム清心女子大学、東京大学国語研究室、国学院大学図書館、日本大学総合図書館、宮内庁書陵部、明治大学、慶應義塾大学、杏雨書屋等であった。主要な所蔵機関では、さらに書物の流通経路や書誌学的調査を推し進め、資料活用のための整備や詳細な研究が現在も継続されている。

1.2 黒川文庫「本草」部門

杏雨書屋は黒川文庫のうち、「本草」部門を多く所蔵する。『杏雨書屋蔵書目録』⁵⁾において、黒川氏の印記を見いだすことはできるものの、今まで黒川文庫そのものに特別の注意を向けられたことはなかった。筆者は当初、五代目武田長兵衛(1870-1959)によって昭和初期に購入され、それを契機に書籍蒐集の勢いに拍車をかけたと伝わる^{6,7)} 榎考書屋に由来する本を調査していた。その過程で、黒川文庫に由来する本が部分集合として含まれることに気づき、黒川本の網羅的探索に着手した⁸⁾。

現在杏雨書屋に所蔵される黒川本は、元の黒川文庫全体の中から、榎考書屋の蒐書指向による選別を経て、さらに杏雨書屋による選別を経ている。そこで、榎考書屋の早川香邨の人物像と黒川文庫「本草」の変遷について概説しておく。

早川香邨(隆助・佐七, 1886-未詳)⁹⁾は日本橋の漬物屋、小田原屋の長男に生まれ、慶應義塾幼稚舎に通う少年時代から博物・植物学に熱心で、22才から30才時までベルリン大学ゲーテムや英国へ留学した¹⁰⁾。留学前から和漢と洋書の植物図書を蒐集しており、専門的特殊文庫として知られていた¹¹⁾。震災で、失った書籍もあったが、購求を続けて黒川文庫「本草」の多くを入手した。そして、昭和2年に『榎考書屋図書目録』¹²⁾を作成したものの、昭和7年-8年頃にすべての蒐書を手放すことになり、和漢の本草書は五代目武田長兵衛が購入した。

杏雨書屋にとっては初めての大規模な購入で、当時蒐書を任されていた伊藤純一郎は吟味を重ねて選書したが、黒川氏旧蔵本は特に優先視されたわけではなく、購入に漏れた本も少なくなかった。特に、農芸・食・動物等の分野は大きく除かれ、さらに医薬・本草書についても例外ではなかった。その後、購入されなかった本のいくつかは藤浪剛一の手渡し、昭和19年頃に乾々斎文庫を経由して入った黒川本もある。

黒川氏旧蔵書の外見的特徴は、図1に示すような蔵書印があり、表紙には部門を示す丸印が捺されているので、黒川本であることは比較的判別

し易い。しかしながら、昭和初期の大量購入時には、目録作成などが追いつかなかつたと伝えられ、今回改めて調査を行ってみると『杏雨書屋蔵書目録』においても、印記の不備や誤認等がみつかった。このような経緯も絡まって、今まで黒川本の範囲については特定化されてこなかった。

今回、黒川文庫・榎考書屋・杏雨書屋など複数の目録を比較検討し、さらに実物の本と照合することによって、杏雨書屋が所蔵する黒川本の範囲を捉えることができた。この過程で、伊藤純一郎旧蔵の『榎考書屋図書目録』を新たに発見し、そこに記された購入に関する書入れからも、有益な情報が得られた。尚、黒川氏旧蔵本の探索と同定に関する方法の詳細は、別稿の目録に付した¹³⁾。本稿では結果として得られた182点(861冊)について、蔵書群としての特徴を述べることにする。

ところで、医薬書や博物書の文庫は、医人や博物学者などによる場合が多く、国学者による本分野の蔵書と書籍の活用について研究対象にされることは、今までほとんどなかった。黒川文庫「本草」部門は当該分野の専門家と国学者との接点が現れたものとして、貴重な存在である。さらに明治・大正期にかけての博物学や医学周辺の書籍編纂や展示会などに関わった本を含み、近代における当該分野における活動について、いくつかの知見をもたらし得るものである。

本稿の構成は、次の第2章で、黒川各氏の略歴と書籍に纏わる事績を紹介する。第3章では、黒



図1

川文庫「本草」の特徴について、「医薬・本草書類」と「博物・物産」の二つに大別し、さらに特徴的な類型に分けて、例を挙げて解説する。第4章では、黒川文庫「本草」の特色について、その史的意味合いを著者の見解を交えて、結びの言として添える。尚、以下に個々の黒川本を挙げる際に、別稿の目録に掲示する書名が長いものについては、紛らわしくない範囲で適宜省略する場合がある。

2 文庫主と蒐書

2.1 黒川春村

黒川(黒河)家はもと伊勢の出で、黒川春村(1799-1866)¹⁴⁾は江戸浅草田原町の陶器商の家に生まれた。幼名は勘吉、通称治郎左衛門、号は本陰、薄斎、葵園など。幼い頃よりよく学び、二世浅草庵から狂歌を学び、俳諧師として名を馳せ、三世浅草庵を嗣いだ。しかし、間もなく門弟の高橋弘道(柳亭種彦二世)に譲り、自身は和歌の道に入り、更に符谷掖斎の門下となった。以降、国学・音韻・考証学に専念し、伴信友・清水浜臣・岸本由豆流らと親しく交流した。

春村の学風は堅実な考証を旨とし、人柄は篤実で、日本各地に広がる学者の情報網の結節点となり、江戸では内藤広前・山崎知雄らの知友と同じく、和学講談所を中心とした主要メンバーであった¹⁵⁾。堀保己一の後、和学講談所総裁職を嗣いだ四男埴忠宝を補佐し、『統群書類従』などの編纂校訂に携わっている。

さらに、須坂藩主堀直格と考究を交わして、『扶桑名画伝』の委嘱編纂を行い、花洒家文庫の文庫掛として管理にあたった¹⁶⁾。著書は『音韻考証』『墨水鈔』などあるが、自筆稿本のほとんどは関東大震災で失われた。

3章で個別に触れるが、黒川文庫の「本草」部門には、堀直格や岸本由豆流など春村と個人的に繋がりがあった著编者・校訂者の書物も含まれ、さらに考証や国学と関連する本が散見され、蔵書の基底に家学の礎を築いた春村の影響が浸透している。

2.2 黒川真頼

真頼(1829-1906)^{17,18)}は、上野国山田郡桐生町新町(現群馬県桐生市)の代々機業を営む金子氏の長子に生まれた。幼名は嘉吉、後に真頼と改め、萩斎と号した。幼い頃より歌を詠み、13歳時に春村について国文・国語・音韻学を学び、ともに叢書の編纂にも関わった。慶応2年(1866)に春村が没し、その遺請により黒川家の家学を嗣ぎ、江戸で門人に教授した。

維新後は、明治2年(1869)から大学校に出仕し、後に文部省に移り、学校設立・開版御用・語彙編集などに携わった。明治8年に元老院代書記生、同10年に内務省に移り、博物局史伝課兼図書課長心得、同14年に農務省に移り、博物局史伝課兼図書課長、帝国博物館学芸委員を経て、明治30年(1897)に帝国博物館監査委員、帝国博物館歴史部長心得を任命され、病氣療養のため退くまで長く博物部門に携わった。その間、東京大学法学部・同文学部講師・東京美術大学教授・國學院講師・東京音楽学校教授・帝国大学文科大学教授などを歴任または兼務して、教鞭を執った。

また、書物編纂にも関わり、明治20年(1887)に東京学士院から『古事類苑』¹⁹⁾の編纂委員に選ばれ、さらに明治25年創設の日本文庫協会(日本図書館協会の前身)の会員となった。

これらの公務の他に、浅草小島街の自宅の書斎では、弟子たちを集めて輪講会を木曜日の夜と日曜の午前中行い、午後は古書店へ通って図書を求め、夏には孫全員を集め一家総掛かりで書籍の虫干しの年中行事をしていたと伝わり、さらに執筆活動のかたわら『書籍目録』や『色葉書目』の作成、特定図書の人名・地名・主要語の索引書の作成もしていた²⁰⁾。

著作は『博物叢書』²¹⁾など多くあり『黒川真頼全集』²²⁾に収録されている。

『古事類苑』について

『古事類苑』の編纂は、西村茂樹の建議により、明治12年(1879)から文部省で始められた。分野毎に事項を立て、明治時代以前の多種の史料から引用を排列した類書形式の百科事典で、歴史百科

全書とも呼べる²³⁾。この事業は文部省から東京学士院、皇典講究所、神宮司庁へと、紆余曲折を経て引き継がれ、明治40年(1907)に1000巻30部門として編纂が完成した²⁴⁾。最近是全テキストの電子化事業が行われ、インターネット上で閲覧できるようになった²⁵⁾。

前述のとおり、真頼は、東京学士院時代に編纂委員の一人として任命され、神宮司庁に引き継がれた際にも編修顧問を任じられている。文部省で当初編纂掛主任だった小中村清矩は、本居内遠の弟子で和学講談所の講師経験者、編修長の佐藤誠実は春村の弟子、というように国学者・和学者が関わっていた。真道も編纂に関わっており、神宮司庁へ移管された当初の助修13人の嘱託の一人だった。

参考までに『古事類苑』における黒川文庫の「本草」に関わるのは、「方技部」内の医業(医術1-4・薬方・疾病1-4)、「産業部」「飲食部」「動物部」「植物部」「金石部」である。引用書目に着目すると、「方技部・医業」では600種以上で、高頻度に引かれるのは『医心方』『医学天正記』『万安方』『本朝医談』『本朝医考』などである。医書以外では『和名類聚抄』『箋注和名類聚抄』『伊呂波字類抄』『下学集』『延喜式』『続日本紀』が上位にある。また、「植物部」の引用書目は700種以上で、本草書では『重修本草綱目啓蒙』『大和本草』『本草和名』などが高頻度に引用される。

以上挙げたような『古事類苑』に引用されている書目は、『黒川文庫目録』にも名を連ねているが、私的な蒐書である黒川文庫の直接的関与は不明である²⁶⁾。しかしながら、家学から受け継いだ書籍の体系的分類法や索引作成などの共同作業における経験知、さらに書籍目録書や辞典類、覚書の類などは、編纂活動に少なからず寄与したものと想像される。

真頼と博物

明治初期の博物局は、殖産興業の一環としての博覧会の開催、歴史的文化財の収集と保管、教育目的など、複数の機能が内在して絡み合っていた。後に帝国博物館(明治22年)、東京教育博物

館(大正3年)、帝国図書館(明治30年)に分化して発展したが、当初は政策の変遷とともに、管轄省庁も転々とした²⁷⁾。

真頼が内務省博物局に身を置いたのは、明治11年(1878)のバリ万博開催を控えた前年であった。この万博ではフランス大統領より古物(アンティーク)の出品を要請する国書が明治天皇に発出されていた²⁸⁾。この機に真頼は、工芸品の技術史料文献を集録して沿革をまとめ、『工芸志料』²⁹⁾を編纂した。これは、日本における産業技術史料の保存と研究を促す契機となったとして高く評価されている。さらに、物産会から発展した内国勸業博覧会にも、真頼は第一回から関与しており、第二回目には審査員となっている。

尚、『黒川文庫目録』内には明治期に刊行された本もあり、それらは博物・物産類のものが比較的多い。そのうち、杏雨書屋に入庫したのは、『魔海魚譜』『改正国産紙名録』『石品産所考』『有用植物図説解説』『有用木材捷覧初編』『錦窠翁耄筵誌』等に限られる。

伊藤圭介の錦窠翁米賀会展示書籍

時期は前後するが、明治に入ってまもない頃、博覧会の開催にあたっては、江戸時代の「物産会」が着目された。そこで、明治4年大学南校物産局が主催する会は、開催経験のある伊藤圭介(1803-1901)に任された。当初明治政府が期待したような、殖産興業を兼ねた会としては実現しなかったが、天産物の学術面では成果を示し、伊藤は初期の博物関連事業との接点を持つことになった³⁰⁾。

そして、明治23年(1880)の錦窠翁米賀会では、博物館も後押しして上野公園で書籍展示会が催された。この展示会の出陳者は伊藤はもとより、博物館、田中芳男、実戸昌らとともに黒川真頼も名を連ねている³¹⁾。

真頼の名で出陳された書籍は、『医略抄』『衛生秘要鈔』『鬼法』『金蘭方』『奇魂』『香薬抄』『万安方』『有林福田方』『霊蘭集』である。

2.3 黒川真道

真道(1866-1925)³²⁾は真頼の四男として生まれ、

家学を嗣いだ。幼名福蔵、のち光長、号は汲古。帝国大学古典科卒業後に『古事類苑』編纂助修の嘱託となり、帝国博物館に勤務した。豊富な資料に恵まれた環境にあり、『日本教育文庫』³³⁾『日本歴史文庫』³⁴⁾『日本風俗図絵』³⁵⁾等の翻刻編纂に携わった。近世国学から近代人文学へつながる「明治国学」の担い手の一人とされる³⁶⁾。また、祖父春村の遺稿を集めて『墨水遺稿』³⁷⁾の校訂刊行、父の『黒川真頼伝』や『黒川真頼全集』を著した。

『日本衛生文庫』について

明治43年から44年(1910-1911)にかけて発刊された『日本教育文庫』の「衛生及遊戯篇」は真道の編纂による。これは真道の凡例を伴い、前半の「衛生篇」には江戸時代ならびにそれ以前の医学関係の書物6本を活字収録している³⁸⁾。大正6年から7年(1917-1918)に教育新潮社から発行された『日本衛生文庫』全6輯〔付図1〕は、これらを含み収録数を40余へ大幅に拡張された³⁹⁾。編輯者は、三宅秀(1848-1938 東京大学医学部教授病理学)と大沢謙二(1852-1927 東京大学医学部教授生理学)で、ともに大日本私立衛生会の役員に名を連ねていた。この会は明治16年(1883)に設立され、当時の衛生思想の普及活動を行っていた⁴⁰⁾。

『日本衛生文庫』は、冒頭の「趣意」にあるように「日本衛生法の大集成」であり、「修養的衛生読本」を意図して編纂された。選書の対象は近世までの国書で、「養生」を題名に含む本や類似の題が目にとまるが、近世における養生概念の範囲に留まらない。収録されたのは、家庭医学的な健康促進や応急手当に関する実用的な内容、あるいは啓蒙的で平易な表現のものが比較的多く、女性・小児・老人を対象とする本が含まれる。

このような選書は、「欧米学者の説く衛生法を学問として尊重すべき」としながらも、日本の衛生法は生活習慣に合い「実際的にして教訓的」として学ぶ価値がある、という「趣意」の反映であろう。一方、実用性は度外視して、数は少ないながらも日本古来の薬方や治法について書かれた本も収録されている。そこには散逸して入手し難く

なった古書を保存しておこうという意図も働いていると推察される。

杏雨書屋所蔵の黒川本の中で、『日本衛生文庫』に収録されているのは以下の10本である。

- ①『産家やしなひ草』佐々井玄敬 1777年刊。
- ②『延寿撮要』曲直瀬玄朔 1599年刊。
- ③『鬼法』富小路範実著 1391年写。
- ④『居家養生記』三宅建治 1807年刊。
- ⑤『雖知苦庵養生物語』平野重誠 1832年刊。
- ⑥『通仙延寿心法』著者未詳 1695年写。
- ⑦『歳玉集』佐藤方定 1861年刊。
- ⑧『養性訣』平野重誠 1835年刊。
- ⑨『養生弁』水野義尚 1856年刊。
- ⑩『學生抄』遊佐好生 1723年写。

『日本衛生文庫』には底本の記載はないが、写本の3本(③⑥⑩)について内容を比較してみると、底本は黒川本であると見做して矛盾は無い⁴¹⁾。尚、⑩『學生抄』は刊行本もあり、それは人目を引く挿絵入りだが、絵無しで文面も若干異なる写本の方が採用されている。

3 黒川文庫「本草」の特徴

現在杏雨書屋が所蔵している旧黒川本182点を大別すると、医学・薬物・本草分野は55%、博物・物産は45%であった。ただし、この算出では植物や動物を扱った書物のうち、薬品への応用とはあまり関係のないものは後者の博物と見做した。時代が進むにつれて、本草は博物学や物産へと分化して多様化するもので、境界領域の特徴を持つ本や、内容的に複数分野に跨がる本が多々あるので、この内訳はおよその目安でしかない。この章では、各分野内にみられた蔵書の特徴を述べることにする。

3.1 医薬ならびに本草書類について

杏雨書屋蔵の黒川本のうち、江戸時代以前の医薬・本草書には比較的知名度の高いものが目にとまる。例えば、『医心方』〔付図2〕『頓医抄』『万安方』『有林福田方』『察証弁治啓迪集』のような医学全集、本草類では『本草和名』〔付図3〕や、『薬字抄』等一連の真言系の香薬類の本草辞書、

表1 成立時代別にみた黒川文庫由来の医薬・本草書

時代	書籍名	補記
平安	本草和名*・医心方*・医略抄* 薬字抄・香薬抄・薬種抄・穀類抄 (大同類聚方・神遣方・金蘭方)	*印は江戸後期の校刻刊本。 丸括弧内は近世の偽撰とされる。
鎌倉	万安方・頓医抄・衛生秘要鈔・医家千字文註*	*印は江戸後期の刊本と写本
室町	有林福田方 ¹ ・鬼法・康頼本草 ² ・霊蘭集・蛭川秘書 天文医家 ³ ・難経逢庵抄・難経雲庵抄・少彦名遣法	1 明暦年間に印行 2 書題は『本草類編選日本勅号記』 と『大和本草別本』(別稿参照) 3 安永年間に校刻。
安土桃山	外療新明集・延寿撮要 ¹ ・察証弁治啓迪集 ²	1 慶長4年の古活字版, 2 慶安2年の刊行本
江戸前中期	通仙延寿心法・養生訓・合類広益靈宝薬性能毒大成 ¹ 變生抄・本草綱目指南音引・名物訳録 食物和歌本草増補・本草一家言・広狭神俱集 ²	1 曲直瀬道三の原著「能毒書」は安 土桃山時代成立。 2 黒川本は江戸後期の刊本。
江戸後期以降	産家やしなひ草・本草正正譌・草臈枕譚・医事古言 居家養生記・薬名考・医贖・本草啓蒙名疏・老婆心書 救荒本草通解 救荒野譜通解・本朝医談・薬名考 増補手板発蒙・医宗仲景考・薬名便覧・長寿養生論 奇魂・校訂薬名備考和訓鈔・雖知苦庵養生物語 養生訣・玉の卵槌・本草綱目啓蒙・神農本草経埤考異 本草綱目袖珍鑑・養生弁・増補飲膳摘要・皇国医系 歳玉集・医籍録・医療襍譚・本草経薬和名考 本草綱目訳説・本草和名同音採集索引・類聚延長本薬名記 薬種一字銘画引・本草沿革・古医方経験 薬名考略 暴瀉須知	
成立期不詳	泉家丸散膏薬秘方・竹田白双紙切紙 妙薬集・養生秘伝	

『康頼本草』などである(表1参照)。

書目数はそれほど多くないので、文庫の傾向として述べるには限界があるものの、医薬分野の内訳として顕著な偏りがあるわけではない。近世以降の流派については、後世方家、古方家、和方家、折衷家、考証家のいずれも含まれている。

一方で、近世に流通した医薬関係書目の全体を考慮してみると、個別の専門治術の本は比較的少ない。そのかわり、江戸時代後期以降の考証家や和方家に関わった本、さらに医事録や随想文が相対的に多いように窺える。また、特別多いとは言えないまでも、養生や家庭医学的な本が目にとまり、本草書や薬物書については、辞書や索引的な本が見られる。

以下これらの特色について補足し、書名の例を挙げておく。尚、目録と重複する内容は最小限に留めておくので、別稿を参照されたい。

(1) 校正本・考証家の写本

『医家千字文註』は鎌倉時代後期、永仁元年(1293)の惟宗時俊による医家向けの「千字文註」である。黒川氏旧蔵書には刊本(天保年間)と写本の2種あり、後者は岸本由豆流(1789-1846)校による文化年代のものである。刊本のもととなった原本は幕末に焼失しているが、岸本由豆流校本には、原本を反映したとされる訓が施されている⁴²⁾。また、墨筆と朱筆の注釈があり、上欄には「濱云」から始まる朱筆の按語が散見される。

岸本由豆流は伊勢国朝田村出身の幕府弓弦師岸本讃岐の養子で、村田春海(1746-1811)に師事した国学者である。同門には、江戸飯田町の医家に生まれ、医者でもあった清水浜臣(1776-1824)がいて、両者間の交流が知られるので、「濱云」は浜臣の可能性が高い。尚、黒川春村は岸本由豆流の自筆稿本を多く文庫に所蔵していたが、その多く

は震災で焼失しており⁴³⁾、この本は岸本由豆流の現存する自筆稿本としても貴重である。

『医療裸譚(医療雑譚)』は江戸時代前中期の医療・医学・本草に関する問答構成の雑録集で、問いは武田叔安からのものである。回答は菑庭(多紀元堅 1795-1857)によるものが多く、槐園(喜多村)、質(小島尚質・宝素 1792-1848)、他にも曾槃昌啓(占春)、玄盅散人(奈須恒徳)も見える。この本は小島氏の印記と「寶素堂鈔本」の料紙が使われている。

欄上には「立之案(按)」で始まる按語、さらに安政6年(1859)の森立之(1807-1885)の奥書がある。そこには、原本の表紙の題は「医療裸談」で小口書には「武問劉答」(劉は元堅)とあったこと、新たに「医事四十四問」と題号を付けたこと、そして原本の筆跡は「宝素君に似たり」と書かれる。要するに原本は、文政年間に元堅の答えを小島宝素が筆記し、回答が得られなかったものについては宝素が他の人へ尋ねまわり、各氏の回答が加わって成立したものであった。

小島尚綱(瞻淇 1839-1880)の万延元年(1860)の奥書には、かつて教諭大淵常範所古坂上池院家が所蔵する原本を見て、借録しようとしたことなどが墨筆で記されている。さらに朱筆で、朱点を付しながら改めて読んでみて、古人が誠実に回答を模索したことや、元堅はじめ諸人と父宝素との交誼がわかって、思わず涙を流した(不覚泗涕之潜然)と綴っている。これが書かれた頃は、すでに宝素は12年前に亡くなっており、元堅も3年前、さらに兄尚真もその頃に亡くし、小島家を継いで間もない20歳代前半であった。尚綱が感涙したように、この問答書にはかつて、元堅や宝素をはじめとした医学考証学の学者仲間の親密な交流が反映されている。

『本草経薬和名考』は『神農本草経』に掲載される本草に対応する和名考証の本で、『本草和名』『康頼本草』『医心方』などを挙げる。この本も小島氏の印記と宝素堂の料紙が使われている。末尾には慶応2年の尚綱の朱筆の識語があり、立之とのやりとりが記されている。ちなみに、森立之の校刻本『神農本草経考異』も旧黒川本にある。

『蟾川秘書』は室町時代文明年間の日付が見える医療の雑録で、多紀門の片倉元周筆、「伊沢氏酌源堂図書記」の印がある伊沢蘭軒(1777-1829)の旧蔵書である。処方や生薬の覚書・背陰の図示、治療記録ならびに日記風の部分もあり、朱筆で誤字を正した箇所が散見される。伊沢蘭軒は福山藩医の子として江戸に生まれ、子弟に洪江抽斎や森立之がおり、幕臣で文人の大田南畝や考証家狩谷掖斎とも親しく、妻は掖斎の二女だった。尚、蘭軒の植物考証本『栄木考』(自筆稿本)も旧黒川本に含まれる。

『本草沿革』は狩谷掖斎の門人、岡本保孝(況斎、1797-1878)による、本草書の沿革と系譜を記した写本である。この本文には森養竹(立之)や多紀楽春院(元堅)の名が見える箇所があり、著者との親交関係が窺える。

以上挙げたほかにも、『衛生秘要鈔』『竹田白双紙切紙』『少彦名遺法』『本草類編選日本勅号記(康頼本草)』『和名鈔』などに校正が施されている。

(2) 医薬用語・本草辞書・索引類

本草や薬名の本としては、平安時代に成った深江輔仁の『本草和名』の古写本を元にした、多紀元簡(1755-1810)による校注刊行本や、平安末期に成立した一連の仏教系の修治用香薬類辞書類『香字抄』『香薬抄』『薬種抄』〔付図4a〕『穀類抄』〔付図4b〕がある。

近世後期の『本草和名同音採集索引』は、『本草和名』の五十音順の索引である。この本は真仮名表記で和名が記され、所々に『医心方』や『和名抄』における別名が付されている。ちなみに、真仮名表記は『古医方経験』〔付図5〕の薬名や病名でも採用されている。また、『和名抄』は室町時代の『康頼本草』に掲載される漢薬名に対して和名を付したものである。

『大同類聚方』〔付図6a-c〕は近世の偽選とされるが、異本間で異なる呼び名や表記があり、それらを一覧化した本に『類聚延長本薬名記』(外題『大同類聚方付録』)〔付図7〕があり、延長本・寛仁本を含む3本を比較している。尚、著者の土屋雅知は、春村に師事した人物である。

そのほか広義の本草分野を含めて、和漢名対応の考証・索引・辞書類を挙げると、『本草啓蒙名疏』『薬名便覧』『本草綱目指南音引』『薬名考』『校定薬名備考和訓鈔』『時物正誤（舜水談話）』『名物訳録』『名物摭古小識』などである。また、学術的なものとは趣を異にするが、『増補手板発蒙』では薬舗名を多く集めており、実用的な異名便覧書と見なせる。

(3) 医史・医事の随筆など

『黒川文庫目録』には、医史的な内容に触れる本もいくつか目にとまる。ただし、『本朝医考』（黒川道祐）、『本朝医蹟』（山科元幹）、『日本医史』等は杏雨書屋に入らなかった。確認できたのは、『本朝医談』（奈須恒徳）、『医事古言』（吉益東洞）、『医賸』（多紀元簡）、『皇国医系』（万年樸山）である。また、『草摠枕譚』（曾占春）内の「医薬の始め」や『奇魂』（佐藤方定）〔付図8〕内の「医薬濫觴」の項目でも医薬の歴史について紙面を割いている⁴⁴。

(4) 古医方書・民間薬

近世後期の和方家といえば、平田篤胤のように皇国思想を帯びた医説を唱えた著書で目を引くが、一方で彼らは日本各地の埋もれた家伝方や神社に伝わる薬方書の探索と保存活動にも熱心であった。例えば、眼科医で後に和方へ傾倒した衣関順庵（不詳-1807）の筆による『避鬼草』がある。

出所が必ずしも明確ではない民間療法などを含む薬方書の例は他にも、『少彦名遺法』〔付図9〕『泉家丸散膏薬秘方』『竹田白双紙切紙』『妙薬集』が挙げられる。

3.2 博物・物産

博物書としては、加賀藩支援のもとに稲生若水が手がけ、丹羽正伯が完成させた『庶物類纂』のような大編纂書、『動物箋』や『花史左編』のような特定分野の抄出本、さらに個別の天産物や事象をテーマにした本など多様にある。また、地域毎の名産品や産業を扱った物産書についても、特徴的な本がある。

(1) 古名考証本・来歴書

網羅的な編纂物ではなく、特定の動植物に焦点を絞って、その対象が本来何であったのかを追求する目的で編まれた本が『黒川文庫目録』に散見される。このような単一主題の考証本（モノグラフ）の多くは、関連する古名や和漢名の収集と、それらの整理と分析作業を含む場合が多い。すなわち、物と物の名とのかかわりについて研究する名物学と関係が深いが、一方で、形態的特徴を分析するような植物学や動物学の知識を扱う場合もあり、必ずしも狭義の名物学に限定するものではない。

杏雨書屋に入庫した中から例を挙げると、『河鹿之解』〔付図10』『河蝦考』『柴木考』〔付図11』『花かつみ考』（藤原義比著）、『花かつみ考』（紀貞一編纂）、『秋の七草考』『木瓜考』『あつめがき』『陰名考』『西仙二柱考』〔付図12〕などである。これらの中には、古名の探索や検証として、和歌を援用するものもある。また、検証材料というよりも、むしろ考証の機縁を「かつみ」や「かじか」のような古歌の題材とするものもある。

ところで、上記に挙げた本にも、対象物の由来や変遷に言及するものが含まれるが、沿革そのものを中心テーマとする来歴書もある。例えば、『木芽説』（茶の来歴）、『煙草集』である。ちなみに『黒川文庫目録』には煙草（蔦）に関する本が他にも2本あり、さらに真頼には「煙草伝来略」の著述がある⁴⁵。また、多紀元簡にも名義や来歴を説いた本があり、『屠蘇名義考』は屠蘇について論じた自筆稿本とされる。

(2) 詩歌と本草・動植物図鑑

植物学や博物学的な関心と、和歌や俳諧が結びついた本は、前述以外にもいくつか見られる。辞書的なものとしては、江戸時代前期の写本『草木異名之次第』があり、これは室町時代の二条良基による連歌の秘伝書『草木異名抄』⁴⁶を再編した植物の異名便覧書である。前述の本草学的辞書類には含まれない名称も、ここには掲載されている。また、『俳諧季寄図考』は植物等の季語についての和名・異名を挙げて図鑑風に仕立てている。

以上の用語集とは趣を異にした写本に、『うらわけころも』と『和歌本草提要』がある。前者は貝の彩色図、後者は墨筆による植物の線描で半丁毎に画かれる。それぞれ対象の特徴を印象的に捕らえた美しい筆致で、和歌図鑑とも見なせる。ちなみに、『渚の丹敷』も貝類の解説書で和歌を交えているが図は含まない。尚、『和歌本草提要』〔付図13〕は錦窠翁米賀会に伊藤圭介の名で出陳され、その解題に「草類を採集し略図を付し古歌古書に徴しその考証を掲げ温故の好書なり」⁴⁷⁾と評している。

和歌とは関係なく、植物や動物の図譜を含む本としては『怡顔齋介品』『桜品』『菌譜』『錦窠翁耄筵誌』『甕海魚譜』『質問本草』『植学啓原』『日東魚譜』『百卉存真図』『本草随観』『有用植物図説』などがある。

(3) 外来物

蘭学や洋学に関係した本は少ないが、2点ほど見つかる。

『染猩々絨小虫説』は赤紫のコチニール色素についての本である。「染猩々絨小虫」とはカイガラムシ(臙脂虫)で、本文には「コセニルレ」「コシニルラ」「コシネルラ」なども記されている。化合物名や学名のほか、異国品は片仮名で表記され、これらには朱筆の鈎括弧が付けられている。著者の柴野栗山(1736-1807)は徳島藩に仕えた儒学者で、後に幕府に仕えて寛政の改革に携わった寛政の三博士(三助)の一人で、湯島聖堂の最高責任者となった。この本には徳島藩蜂須賀家の栗山由来の本に捺される蔵書印があり、栗山が阿波侯に上げた自筆本である。

『海外異魚』〔付図14〕は墨の濃淡で描かれた魚や鳥、爬虫類など動物の図が含まれる。表紙右の墨筆と内題は「蒲乙斯字書抜粹」と書かれ、『ボイス学芸事典』⁴⁸⁾から抄出して翻訳した本と推定される。「奇魚」の項目以下、本文は「亜墨利加ニアハカチュエアイト称スル魚アリ」から始まる。同原本の抄出翻訳については、適塾門の黒田翹廬(1827-1892)が行ったと知られており⁴⁹⁾、内容を比較してみるとほぼ一致した。黒田翹廬は近江藩

の儒官黒田梁洲の子息で、緒方洪庵・伊東玄朴に蘭学を学んだ洋学者で、『ロビンソン・クルーソー』の本邦初の翻訳者としても知られる。

(4) 絵図を伴う物産書

物産や産業に関する本は、江戸時代後期から増え、博物と重なる部分も多々あるが、ここでは図譜を伴う本を主に取り上げる。

農学者大蔵永常による『国産考(広益国産考)』は、林業・農業・醤油・砂糖・灯油、蠟綿、養蚕、手工芸品など広範に扱う。この本は具体的な方法や流通を説く技術書の範囲に留まらず、著者の殖産興業に対する見解が述べられ、政策者や知識人、起業家へ向けた一種の啓蒙書でもある。

一方、長谷川光信の画筆を交える『日本山海名物図会』は広い読者層も想定して、読みやすく編纂されている。彩色で描かれているのは、日本各地の製塩・精糖・製陶・製紙・鉱物採取・宇治の茶摘・海女などの労働図、諸国物産図などである。特産品や名物の知識普及に役立ち、風俗画や名所案内のような側面もある。ほかにも刊本では、島津重豪が曾占春と白尾国柱に編纂を命じた『成形図説』があり、農業関係を中心に作物や道具の図、作業風景などが描かれている。

『造酒製法・濁酒焼酒醤油製方』(写本)は酒類や醤油の醸造の技術解説書で、労働の様子や専門用具の彩色図が多く含まれて、業界特有の用語の理解にも役立っている。絵師は不明だが、リズム感のある筆致で詳細に描かれ、工程がよく把握できる。黒川氏以前の旧蔵者は、越後長岡藩の藩儒秋山景山の嗣子、秋山恒太郎(1844-1911)である。恒太郎は文部官僚で明六社の会員、「不羈斎(ふきさい)図書記」を用いた蔵書家でもあった。尚、この本は杏雨書屋の早川本購入の際には選ばれなかったが、藤浪文庫経由で入った。

『臘臍膾漁図説』(写本)はオットセイ猟の彩色図を伴う解説書である。漁法・漁具・解体と加工などについて現地の呼び名(アイヌ語)を交えて説明され、絵は見開き全体に大胆な構図で情景豊かに描かれている⁵⁰⁾。著者村上島之允(島之丞・秦檜丸(はたあわきまる)、1760-1808)は伊勢出

身で、松平定信の命で地理調査のために諸国を巡って画筆を振るい、蝦夷地探検ではアイヌ民族を描いた⁵¹⁾。門弟は多く、間宮林蔵も含まれる。

以上数を限って例を挙げた。これら以外にも農業関係では『汝南圃史』や『欽定授時通考』がある。さらに元の黒川文庫には『農業全書』や畜産・水産・食品関係の本もあったが、結果的に杏雨書屋に入ったものは少なかった。

4 おわりに

医薬・本草・博物の文庫として見た場合、杏雨書屋に所蔵される黒川文庫「本草」部門は書目数としては決して多くはないものの、『本草和名』や『医心方』にはじまる日本における歴代の代表的な医書や本草書が含まれ、中には貴重な写本も含まれている。そして、書物とともに歩んできた、医薬・本草・博物分野の明治初期に至る展開が、黒川文庫の蔵書群から窺うことができる。すなわち、日本へ伝わった医書や本草書が、中世以降日本化しながら分化発展し、近世に至っては和漢の書物を横断的に活用して学究的活動が盛んとなり、一方で博物や物産へと展開し、さらに細分化して精密化を遂げた変遷の縮図である。

黒川氏と蔵書との関係という視点では、第一に江戸時代後期から明治・大正にかけての書籍編纂やその他の公私に跨がる活動に供されてきた本をいくつか見いだせた。すなわち、私的文庫の枠を超えて、「公に向けて活用されてきた蔵書」として特徴付けられよう。さらに、中世以来の書籍をそろえた黒川文庫の存在は、その管理に伴う索引書や目録作成など通じて、春村と真頼の江戸末期における叢書編纂経験とともに、明治時代の『古書類苑』編纂等の事業に生かされたはずである。

第二に、医薬・本草・博物のいずれの分野にも考証学や用語・語彙研究を反映した特色のある本が存在しており、それらは春村や真頼の国語学や語彙研究と潜在的に重なり合う部分がある。もとより国学者は、専門用語の辞書や索引の作成、文献考証、そして古書発掘や校訂本の出版活動など、書物を通じて分野を跨いだネットワークを作っていた。この文庫でも、著編者や旧蔵者の印

記から、医人のみならず様々な職業や階層の人々が交差していることが窺え、近世において国学と医学は、多様な形で接点を持っていたことが確認できる⁵²⁾。そして、第三の特色、春村の人脈から迎れる著者や校正者による本の存在も、近世における多層な共同作業と知識共有の広がりへの反映と見なせよう。また、この部門においても和歌が織り込まれた書籍が見え、国学者の蔵書らしさが現れている。

医学分野からの視点では、本章の冒頭で触れたように、近世までの日本における医薬の歩みを反映する本を含むというだけではなく、庶民向けの啓蒙読本『日本衛生文庫』の底本に活用されるなど、近世から近代への健康知識普及の過渡期における、時代の様相を反映した編纂事業にも関わっていた。それは日本文化を考慮した現実的な衛生施策の反映であった。そしてまた、当時の古書保存への気運の高まりも、このような編纂事業を後押ししたものと考えられる。現代において、これらの翻刻出版物がインターネットで閲覧できるようになり、底本が現存している重要性は再認識されるであろう。

ところで、黒川文庫の売却以来、文庫主が変わる過程で、失われた本や所在不明の本があるのは残念ではあるが、文庫の変遷は必ずしも損失ばかりではない。たとえば、『庶物類纂』のような大編纂物では、早川氏購入以前の黒川本には欠本が多かったが、榎考書屋が所蔵した喜多村直寛手写本や、同書屋が作成した写本によって補われ、258冊の一揃いとなり、利用者の便が向上している。

尚、本稿で取り上げた黒川文庫「本草」の特色は、筆者が捉えることのできた限定的な側面であり、見落としやさらなる追求の余地を多く残していると思われる。別稿の目録と併せて、そのため足のかりとなれば幸いである。

謝 辞

黒川文庫を含む杏雨書屋蔵の榎考書屋本の調査実施を勧めて頂き、研究を進めるにあたり、多くのご指導と励ましを賜った小曾戸洋先生に心より感謝申し上げます。また、書籍の出庫や施設の利

用に関して便宜を図って下さった百瀬祐氏、瓢野由美子氏ほか杏雨書屋の関係者に厚く御礼申し上げます。

本研究は2016年度杏雨書屋研究奨励の一部です。

注・参考文献

- 1) 内田魯庵. 典籍の廃墟. 紙魚繁昌記 魯庵隨筆続. 東京: 書物展望社; 1934. p.63-67.
- 2) 永田清一. 黒川文庫. 実践女子大学文学部紀要 1981; 23: 1-16.
- 3) 城田秀雄. 黒川真頼家蔵書目録影印(一)『書籍目録天上』(調査報告 25-1). 実践女子大学 年報 1989; 8: 129-160. 以降1996年の同年報の『書籍目録人下』(調査報告 25-8)までの8回に渡る.
- 4) 柴田光彦. 日本書誌学大系 86 黒川文庫目録. 東京: 青裳堂書店; 2000.
- 5) 杏雨書屋蔵書目録. 大阪: 武田科学振興財団; 1982.
- 6) 小曾戸洋. 杏雨書屋のコレクション. 日本医史学会雑誌 2015; 61(1): 9-11.
- 7) 斎藤幸男. 武田科学振興財団・杏雨書屋. 薬学図書館 1997; 42(1): 112-116.
- 8) 吉川澄美. 杏雨書屋所蔵の黒川文庫「本草」について: 早川佐七の査考書屋との関係. 日本医史学会雑誌 2019; 65(2): 258. 2019年学術大会発表時には177点であったが, その後の調査で182点となった.
- 9) 大正人名辞典II 上巻. 東京: 日本図書センター; 1989. p.41. 底本は『大衆人事録 昭和三年版』(昭和2年 帝国探偵社).
- 10) 吉川澄美. 早川香邨の査考書屋. 杏雨 2023; 26: 334-352. 「早川植物研究所」で標本作製も行っていた. 「査考」の「考」字は草冠に「考」.
- 11) 小野則秋. 日本図書館史. 京都: 玄文社; 1981. p.276-277. 文庫が消滅したのは, 関東大震災によると書かれるが, 昭和7-8年頃に杏雨書屋(和漢)と丸善(洋書, 後に台湾へ)に売却されたことによる.
- 12) 早川香邨. 査考書屋図書目録. 東京: 査考書屋出版部; 1927. 目録の内容ならびに査考書屋については前掲書10)も参照.
- 13) 吉川澄美. 杏雨書屋蔵 黒川文庫目録. 日本医史学雑誌 2023; 69(3): 316-336.
- 14) 国学者伝記集成 第二巻. 東京: 国本出版社; 1934. p.1432.
- 15) 渡辺滋. 蔵書の玉手箱 黒川春村の『尾張国解文』研究: 近世国学者による古代史研究の一例として. 図書譜: 明治大学図書館紀要. 2001; (5): 176-193. <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/8693230>
- 16) 前掲書11) (小野則秋) p.136-137.
- 17) 明治大正文学美術人名辞書. 大阪: 立川文明堂; 1926. p.310.
- 18) 黒川真道. 黒川真頼伝. 桐生: 奈良書店; 1979. (大正8年刊の複製) <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/957995>
- 19) 古事類苑. 東京: 古事類苑刊行会; 1908-1930.
- 20) 前掲書2) (永田清一) 引 佐藤利文. 黒川真頼先生言行録. 國學院雑誌: 1906; 12(10): 1026. 近代文学研究叢書. 東京: 昭和女子大学近代文学研究室; 1958. p.466.
- 21) 黒川真頼. 博物叢書. 東京: 内務省博物館; 1879-1880.
- 22) 黒川真道編. 黒川真頼全集. 東京: 国書刊行会; 1910-1911.
- 23) 坂本太郎. 坂本太郎著作集 第5巻. 東京: 吉川弘文館; 1989. p.169.
- 24) 熊田淳美. 三大編纂物 群書類従 古事類苑 国書総目録の出版文化史. 東京: 勉誠出版; 2009. p.81-129.
- 25) 国文学研究資料館 古事類苑データベース <http://base1.nijl.ac.jp/~kojiruie/> 国際日本文化研究センター 古事類苑全文データベース <https://ys.nichibun.ac.jp/kojiruie/> (いずれも2022年9月確認)
- 26) 建議書では引用書は浅草文庫(後の内閣文庫), 東京府書籍館(後の帝国図書館)等のものを主に使う方針が示されていた.
- 27) 並松信久. 近代日本における博物館政策の展開. 京都産業大学日本文化研究紀要 2016; 21: 291-252.
- 28) 外務省. 博覧会の実施と明治の万博計画(1). <https://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/honsho/shiryo/banpaku/page2.html> (2022年8月確認)
- 29) 黒川真頼. 工藝志料. 東京: 博物局; 1876. 国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/854119>
- 30) 並松信久. 近代日本における博物館政策の展開. 京都産業大学日本文化研究紀要 2016; 21: 291-252.
- 31) 田中芳男編輯. 錦窠翁米賀会誌 出品書籍解題之部. 東京: 安戸昌; 1891. p.39.
- 32) 近代文学研究叢書八巻. 東京: 昭和女子大学近代文学研究室; 1958. p.463.
- 33) 黒川真道編. 日本教育文庫. 東京: 同文館; 1910-1911.
- 34) 黒川真道編. 日本歴史文庫. 東京: 集文館; 1911-1912.
- 35) 黒川真道編. 日本風俗図絵. 東京: 日本風俗図絵刊行会; 1914-1915.
- 36) 國學院大學日本文化研究所. 歴史で読む国学. 東京: ベリかん社; 2022. p.213-214.
- 37) 黒川春村著 黒川真道校訂. 墨水遺稿. 東京: 吉川半七; 1899.
- 38) 「衛生篇」に収録されるのは『道三翁養生物語(一名雖知苦庵養生物語)』『延壽撮要』『いなご草』『教民

- 妙薬』『養生訓（陸舟庵）』『小児必用養草（一名小児養草）』である。
- 39) 日本衛生文庫。東京：教育新潮研究会；1918。（略して「衛生文庫」とも呼ばれる）例言から真道も編纂に関わったことが窺える。
- 40) 瀧澤利行。健康文化論。東京：大修館書店；1998。p. 46-64。
- 41) 吉川澄美。杏雨書屋所蔵の黒川文庫に見る『衛生文庫』の底本：『通仙延寿心法』と『學生抄』を例として。医譚 2020；111: 9606-9608。（日本医史学会関西支部 2019 年秋季学術集会抄録）
- 42) 『医家千字文註』の訓のある写本は他にも存在して原本によるとみられている。辻本裕成。『医家千字文註』の基礎的研究。南山大学日本文化学科論集；2009, 9: 19-36。
- 43) 前掲書 2) (永田清一)
- 44) 吉川澄美。令和（なぐし）をクスリ・クスシの語源とする説：佐藤方定著『奇魂』の古代医薬概念。医譚 2019；109: 61-73。
- 45) 前掲書 22) (黒川真頼全集) 第 5 卷に所収。
- 46) 二条良基。草木異名抄。国立国会図書館デジタルライブラリー <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2539914> など。
- 47) 前掲書 31) (錦窠翁米賀会誌) 掲示番号 908。
- 48) 「ボイス学芸事典」または「ボイス学芸百科事典」と訳された本。原本は Buys Egbert. Nieuw en volkomen woordenboek van konsten en weenschappen. Amsterdam: S. F. Baalde; 1769-1778. 10 dln. 『杏雨書屋蔵書目録』では「原本ショメール」となっていたが、「ボイス（蒲乙斯・Egbert Buys) 原本，黒田麴廬抄出訳」へ変更した。
- 49) 平田守衛。黒田麴廬の業績と「標荒紀事」。東京：東京大学学術出版会；1990。p. 113-117。
- 50) 村上島之允の『蝦夷風俗図説 2』に「膾膾膾膾図説」があり，似た図が含まれる。函館市中央図書館デジタル資料館 <http://archives.c.fun.ac.jp/> 資料番号：be001083-0002。
- 51) 函館市史編さん室。函館市史 通説編第 1 卷。函館：函館市；1980。p. 542。『杏雨書屋蔵書目録』では「著者未詳」となっていたが『植考書屋図書目録』も参考にして「村上島之允」とした。
- 52) 日本医史学会。医学史事典。東京：丸善出版；2022。p. 370-371。

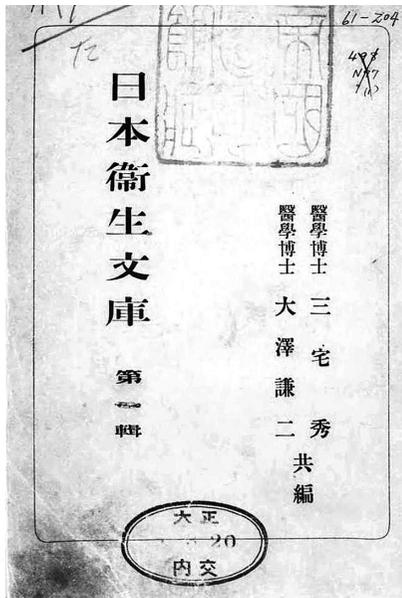
年々施行せらる、且検査の成績は明かに我が國民體格の低下を示せり、如斯にして推移せんか、邦家の前途は甚憂心に堪へざるものあり。近來結核豫防の策せらる、花柳病防遏の講せらる、國民體育法の論せらる、公衆衛生法の研究せらる、寔にその實を得たるものなりと雖も、然も國民一般の衛生思想は尙依然として甚幼稚なるものあり。吾人は今秋に於て邦人一般の衛生思想を振起するは國民體格の向上を圖るの基礎たるを信せん。

惟ふに明治維新の初、泰西新文明の移入に急なし結果、衛生法亦彼を採る事のみを努めて、本邦先人の古來攻究し來れるものは全く之を放擲したり、爾來この陋習は依然として繼續せられ、衛生を説くもの其管轄を歐米に採らんとす。惟ふに歐米諸國と我邦と國民の生活状態に於て、氣候風土に於て甚しき差異あり、その衛生法亦差異のものなるべからず、單に彼地のそれを移植したるのみにては、我邦の實用をなさざる事論するまでもなるべし。

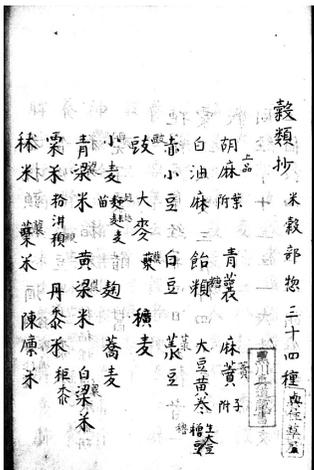
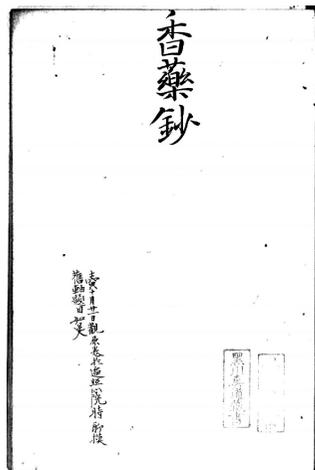
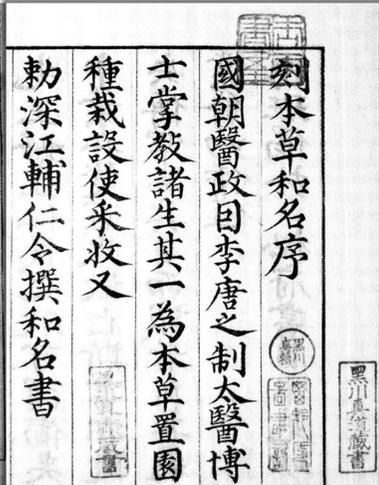
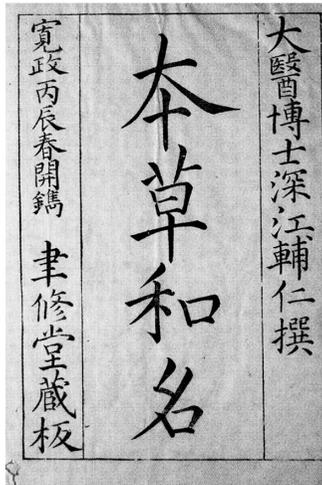
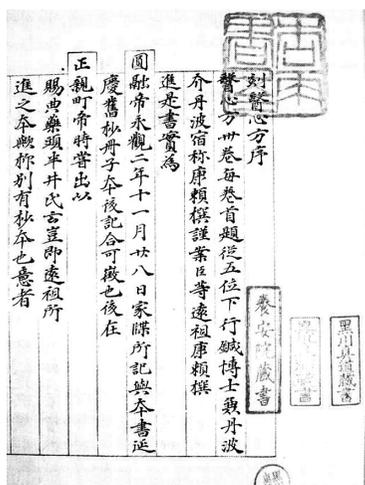
歐米學者の説く衛生法は組織整然極めて科學的なり、學問として尊重すべし、我

日本衛生文庫發刊の趣意

發刊の趣意



〔付図1〕上段
『日本衛生文庫』
国立国会図書館デジタル
コレクション



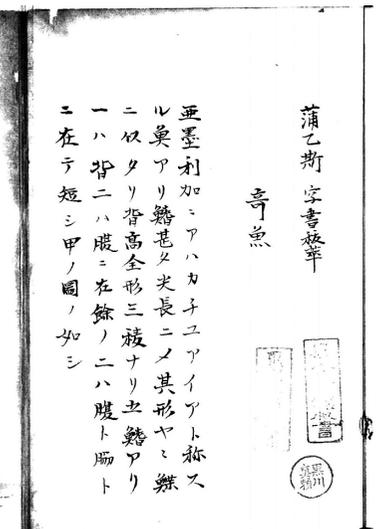
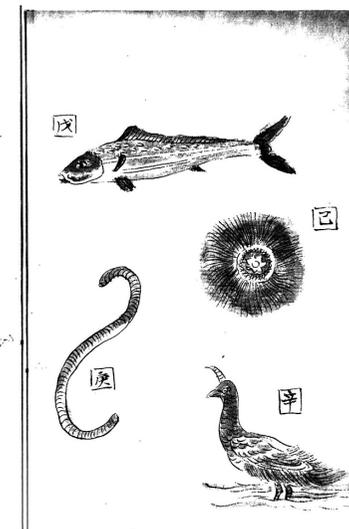
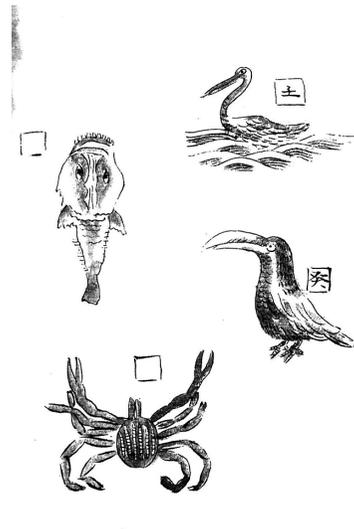
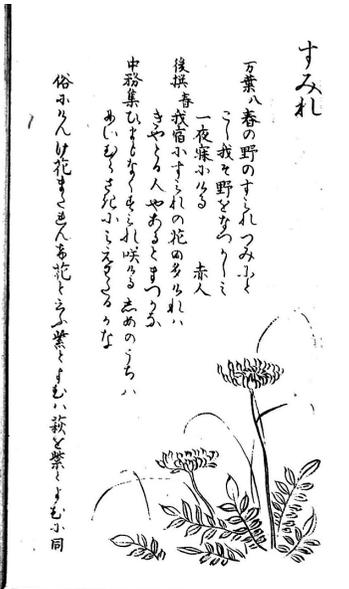
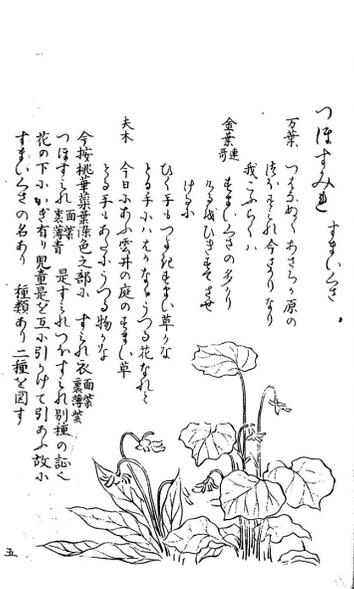
(以下【】内は杏雨書屋の管理番号, []内は別稿「杏雨書屋蔵 黒川文庫目録」の番号)

〔付図2〕中段左
『医心方』【貴30】[9]

〔付図3〕中段中右
『本草和名』【杏210】[151]

〔付図4a〕下段左
『香藥抄』【杏3517】[53]

〔付図4b〕下段中
『穀類抄』【貴149】[60]



〔付図13〕 上段『和歌本草提要』【杏6743】[181]

〔付図14〕 下段『海外異魚』【杏1671】[26]

The Kurokawa Bunko Collection, Possessed by the Kyo-U Library of the Takeda Science Foundation

Sumi YOSHIKAWA

Tokyo

The Kurokawa Bunko is a collection of three generations of scholars of Kokugaku (Japanese classical literature and culture); Harumura, Mayori and Mamichi Kurokawa, from the late Edo period to the Taisho period. It included over 80,000 systematically classified books in three dedicated storehouses, but two-thirds of them were destroyed in the Great Kanto Earthquake (1923) and subsequently dispersed. Soon after the earthquake, most of the “Honzo” category of the collection was purchased by Koson (Sashichi) Hayakawa, (Sakō Shooku), which was then purchased by Chobei Takeda, a founder of the Kyo-U Library, in the early Showa period. As a result, the library holds the “Honzo” category of the Kurokawa collection; however, no particular attention has been paid to this distinctive collection. I identified books equivalent to 182 titles formerly owned by Kurokawa, and created a catalog (*Nihon Ishigaku Zasshi* 2023; 69(3): 316–336).

This paper examines the relationship between the works of the Kurokawa family and the collection, as well as the characteristics inherent in the “Honzo” category. This category mainly comprises studies on medicinal materials, botany, natural history, agriculture, and regional specialty products and crafts. A notable aspect of this collection is in regard to its holding representative medical and herbal books from the medieval period in Japan, together with collated manuscripts and publications by scholars of the late Edo period. Furthermore, there are unique monographs and compilations where etymological research, comparative terminology, and other philological studies on names and provenance are applied, besides pictorial books and rare natural history compilations associated with waka poems.

Key words: book collection by scholars of Japanese literature and culture, classical medicinal books, philology, herbs, natural history